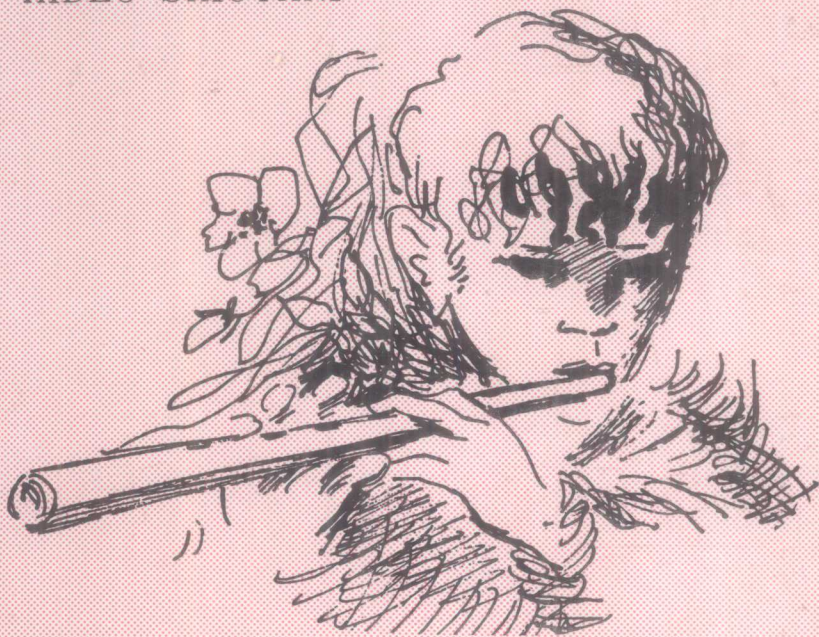


OSCAR WILDE

THE HAPPY PRINCE AND OTHER TALES

WITH INTRODUCTION AND NOTES BY
YASUHIRO ISHIKAWA
HIDEO SHIOTANI



Illustrated with line drawings by
PEGGY FORTNUM

J.M. DENT
SEIBUN-DO

OSCAR WILDE

THE HAPPY PRINCE
AND OTHER TALES

WITH INTRODUCTION AND NOTES

BY

YASUHIRO ISHIKAWA

HIDEO SHIOTANI

Illustrated with line drawings by

PEGGY FORTNUM



SEIBUN-DO

OSCAR FINGAL O'FLAHERTIE WILLS WILDE

was born on 16th October 1854 at Dublin, Ireland. While at Magdalen College, Oxford, he won the Newdigate Prize for poetry. Though he is most often thought of as the author of 'The Importance of Being Earnest' and other brilliantly witty plays, his tales for children have a high place in the literature of our language. He loved telling stories to children, and those in this book are among the many with which he entertained his own two boys.

'The Happy Prince and Other Tales' first appeared in 1888, and another collection of tales, 'A House of Pomegranates', in 1891. Both were instantly successful. Celebrated critics have praised them and called them literary gems, but what matters most to the readers of this book (which contains them all) is that children enjoy them so much. They enjoy the rich imagery and poetic language and they value the seriousness underlying the beauty and romance.

These stories are often called fairy-tales, but they are not all about fairies. 'Magical' is probably a better word, for every one is full of magic—magical people and magical happenings, magical beauty and magical sounds—and there is magic in the imagination that created these things and in the words which describe them.

True, they are often about kings and queens, witches and mermaids, dwarfs and sorcerers—the very stuff of fairy-tales. But these characters are very human; their failings and their good points are part of their nature as they are of ours, and the fascination of these stories is that they have something to say to us about life in our own world and our own time.

THE HAPPY PRINCE AND OTHER TALES by Oscar Wilde

Illustration Copyright © 1978 by J. M. Dent & Sons Ltd.

Japanese illustrative reproduction rights arranged with

J. M. Dent & Sons Ltd., London

Through Charles E. Tuttle Co. Inc., Tokyo, Japan

Reprinted by

Seibun-Do Co. Ltd., 1978

514 Tsurumakicho, Waseda, Shinjuku-ku, Tokyo

編註者略歴

石川康弘 (いしかわ やすひろ)

1940年 バリ島デンパッサル市生まれ
1968年 青山学院大学大学院文学研究科英米文学専攻修了
現在 関東短期大学専任講師・文学修士
主要論文 An Appreciation of Hardy's Poems
Thomas Hardy 紹介史
その他

塩谷秀男 (しおたに ひでお)

1941年 東京都生まれ
1966年 中央大学大学院文学研究科英文学専攻修了
現在 関東短期大学助教授・文学修士
主要論文 ダンテ・ロゼッティ研究
ディラン・トマス研究
その他

THE HAPPY PRINCE AND OTHER TALES

検印省略

1978年 4月 20日 初版 第1刷 発行

編註者 石川康弘
塩谷秀男

発行者 阿部義任

〒162 東京都新宿区早稲田鶴巻町514

発行所 株式会社 成文堂

電話 東京03(203)9201(代) 振替 東京6-93491

製版 誠之印刷 印刷 ツカサ印刷 製本 佐抜製本
☆落丁・乱丁はおとりかえいたします☆

3082-940181-3851

©1978 Y. ISHIKAWA
H. SHIOTANI

は し が き

いつの頃からか大学や短大の教養クラスで Wilde の童話を読むようになった。はじめは確か短大で将来幼稚園や小学校の先生を目指す学生諸君に少しでもプラスになればという軽い気持で、また一つには Wilde に対する編者の嗜好も手伝ってテキストにしたのだったと思う。ところが最近単なる好みのせいばかりでなく若い学生諸君の新鮮な反応に刺激されてか、すっかりそれが編者の座右の書になってしまった。

元来すぐれた童話はその多くが子供たちのお話であると同時に常に何ほどこは大人の物語であったし、また批評家の言を待つまでもなく、すぐれた文学とは読むたびに新しい美しさと真実があらわれ出るものなのだから、読者の成長につれてその深さを増す Wilde の童話はまさにこの意味での一級品であろう。

ある学生の読後感に「むかし母から聞いたこの童話を大学生になった今英文で読んでみて、その内容の深さにあらためてびっくりしました。私はこの本を嫁入り道具の一つに加えることに決めました。生れてくる子供にこのお話をして聞かせ、大きくなったら私が教室で読んだこの本を与えてやるつもりです」というのがあった。Wilde の童話は親子代々心の宝だと言いたいのであろう。事実、「王子さまやツバメのように自分も何かの役に立ちたい」とか、「身勝手な大人をどうしても許せない」とか、「自分の心を見透かされているようでこわい」とか、学生諸君の反応は実に様々である。が、こうした真摯な感想を聞くにつけ、とかく“クールに過ぎる”と嘆かれがちな現代の若い人たちにもその真価は決して失われていないことを痛感するのである。

そこで、ここに Wilde の童話の全作品（九編）を出版当初の姿のまま

ま *The Happy Prince and Other Tales* 及び *A House of Pomegranates* の二冊本とし、紙数の許すかぎり詳しい注を施すことにした。いずれも注さえあれば、原文のまま誰にでも楽しめるばかりかその後いくつになって読んでも決して飽くことを知らない童話集である。実は、編者が本書を単に英語を学ぼうとする学生諸君の書とするだけでなく広く一般読書家の愛読書にと願う気持もここにあるわけで、このため底本には英国 Dent 社の最新版を選び、あわせてその美しいさし絵もそっくり転載させて戴くことにした。

本書出版に際してはこの版權交渉からはじめて装丁その他すべての点で、成文堂社主阿部義任氏及び編集の土子三男・本郷三好両氏から一方ならぬ御好意と御協力を得た。記して感謝したい。

なお、本書 *The Happy Prince and Other Tales* には『解説』にも記した通り Wilde の代表的童話五編が収録されているが、更に興味をもたれる方はこの姉妹編で一層めずらしい魅力にあふれる *A House of Pomegranates* (成文堂刊) へと読み進まれることをお勧めしたい。

1978年3月

編註者

Oscar Wilde (1854—1900) について

幼い頃 Wilde が得意になって署名したこともあったというおそろしく長い名前——Oscar Fingal O'Flahertie Wills Wilde——これが彼の正式な名前である。父は眼科、耳鼻科を専門とする名医で後に Knight に叙せられたほどの人である。ところがこの人は医学の他に文学、考古学の分野でも多大な功績を残した知識人でありながら、一方では大のアルコール好きでこの方での失敗やトラブルが絶えなかったようである。母は才色兼備の女流詩人。ドイツ、フランス語はもちろんギリシャ、ローマの古典語にも通じる一方、Dublin 社交界の中心的存在として知られた令婦人であった。

Wilde がこの両親の第二子（次男）としてアイルランドの首都 Dublin に呱呱の声をあげたのは1854年10月16日のことである。幼い頃の Wilde に関しては、生れてくる子が必ず女の子であると確信していた母親によっていつも女兒の洋服を着せられていたという有名なエピソードもあるが、やがて成長した Wilde はこの地の Trinity College から Oxford の Magdalen College へと進み、ここを優等で卒業する。Oxford での Wilde は古代史の John Mahaffy、及び、John Ruskin、Walter Pater から唯美主義の学者、教授から多大な影響を受け、以後急速にこの主義に傾倒してゆく。在学中すでにその活動を注目された Wilde は卒業後更にこの唯美運動（Aesthetic Movement）の唱導者として一躍世に知られ、また社交界の花形としても脚光を浴びた。

詩人、小説家、劇作家、また批評家でもあった彼はこれらすべての分野にすぐれた業績を残している。中でも彼の芸術論の実践とみなされる

唯一の長編小説 *The Picture of Dorian Gray* (1891) は我国にも古くから紹介された名作である。また評論集 *Intentions* (1895) には “Art for Art’s Sake” のいわゆる芸術至上主義的彼の芸術論が詳しい。しかし Wilde は劇作において最もよくその才能を発揮したと言われ、*Lady Windermere’s Fan* (1892)、*A Woman of No Importance* (1893) などの喜劇の他、唯美主義の頂点を示す悲劇 *Salomé* (1893) などの作品がある。

なお、*Salomé* ははじめフランス語で書かれた一幕物であったが、Wilde はこれを英訳した青年貴族 Alfred Douglas との同性愛問題で 1895年 5月、例の Douglas 事件を引起して投獄された。後に出版された *De Profundis* (1905) はこの時の獄中記である。1897年、二年間の獄中生活の後、一人大陸へ渡った Wilde はやがてフランスに着くが、その後は再びイギリスへ戻ることもなく三年後の 1900年、家族との再会もかなわないまま、Paris の裏街で窮乏のうちに 50年に満たない生涯を終えた。

The Happy Prince and Other Tales (1888) について

Wilde の二つの童話集のうち、この *The Happy Prince and Other Tales* は続く *A House of Pomegranates* (1891) に比べると一般的にかなりよく知られ、またよく読まれている。理由はただ内容の優劣によるものではなくおそらく中学、高校の英語テキストにとられる彼の作品のほとんどがこの童話集にあることと、聖書にならったやや古雅な文体で比較的長い作品ぞろいの *A House of Pomegranates* に比べ、*The Happy Prince and Other Tales* の方が読みやすく、分量的にもずっと短い作品ばかりのせいであろう。

殊に、その表題にもとられた ‘The Happy Prince’ の場合、たとえ

英語を学んだことのない人でも、市の広場に立つ美しい王子の像が飛んできたツバメの力を借りて貧しい人々を救うこの話なら、かつて一度はどこかで読んだか聞いたかした記憶があるはずである。実際この作品を読んで、主人公の王子が人々の不幸にその金色の頬をぬらす情景や、その王子の足もとに一夜の宿を借りたツバメがやがて命をかけて彼に仕える様子に心打たれない人はないであろう。凜々しい王子と心やさしいツバメ——、それにひきかえ市長や市議会議員をはじめ現実社会の大人たちは何んと意地汚なく利己的なことか。清々しく美しい一幅の絵をあさましい矛盾だらけの現実というごてごてした金メッキの額縁におさめたような——そしてだからこそ一層その絵が引立つように仕組まれた、そんな感じのする作品である。

‘The Happy Prince’ が王子とツバメという二人（一人と一匹？）の主人公を舞台にのせ、やがてふとしたことで二人がかかわりをもつことからドラマが始まり、主人公たちの性格的対比や対立によってクライマックスから終局へと、典型的劇的小説の技法を駆使しているのに対して、‘The Nightingale and the Rose’ はまた完全に古典劇の法則にのっとった芸術的完成度の高い作品である。古典劇の法則とはいわゆる時間、場所、筋の三単一（The unities）のことで、若い学生の庭を舞台に展開されるこのドラマはわずか一日の出来事を扱い、赤いバラが咲くか否かの筋もきわめて単一なものである。しかし反面、これほど簡単な筋の中にかくも妖しく美しい幻想の世界を、しかもこれほどやさしい文体で創出し得た作品もまためずらしい。色鮮やかな宝石にも似た喩えの妙と言いい、鋭いトゲに胸を押しあてて絶唱するナイチンゲールと言いい、やがて妖姫 Salomé のドラマに絢爛と花ひらく Wilde の官能美の片鱗はすでにこの作品にもうかがえる。

かつて Wilde はこの童話集を Oxford の恩師 Walter Pater に献じ

た。そしてこの時たまたま病床にあった Pater から、

“I have been confined to my room... but have been consoling myself with The Happy Prince, and I feel it would be ungrateful not to send a line to tell you how delightful I have found him and his companions. I hardly know whether to admire the wise wit of ‘The Wonderful Rocket’ or the beauty and tenderness of ‘The Selfish Giant’; the latter certainly is perfect of its kind. Your genuine little poems in prose are gems and the whole, too brief, book abounds with delicate touches and pure English.”

という絶賛の言葉を送られる。その中で美文家 Pater が完璧とまで称えたのが ‘The Selfish Giant’ であった。ある意味では Wilde の童話中最も読みやすくまた一番短くもあるこの作品は、あるわがままな巨人が遊びに来た幼な子の両手のひらにある愛の傷を見て、自分の利己主義を悟るといふだけの話であるが、この話には救い主イエスの復活という壮大なドラマがオーバーラップしてえも言えぬ効果をあげている。実に美しい作品である。

次に来る ‘The Devoted Friend’ はまたこれとは対照的に、お人好しで忠実な小男ハンスが徹底的に彼を利用するこの上なく不実な友人、粉屋のヒューに裏切られるというずいぶん後味の悪い寓話である。しかしそれだけにかえてハンスの善意が光り、また彼の善意につけ込む友人ヒューの姿には悲しい人間の象徴を見る思いすらする作品である。一般に Wilde の童話は博愛と献身を主題とするきわめてキリスト教的色彩の濃いもの、反対に妖しいまでの異国情緒を漂わせる異教的香りの高いもの、及び彼一流の皮肉と逆説を基調とする戯画的特徴を有するもの

の三つに分類されるが、この ‘The Devoted Friend’ はその最後の部に属するもので、ある時偶然川辺に集まった動物たちのうち、一羽のヒワがたいへん友情に厚い粉屋の話を皮肉たっぷりに語る形式をとっている。Wilde の童話としては“語り”の形式もめずらしいが、とにかくこの友情に厚い粉屋はハンスの小さな庭園から折角彼が丹精込めて育てた花をみんなもっていってしまうのである。

London の霧について、“They (=Fogs) did not exist till Art had invented them.” と言うかと思えば、人生については、“Life imitates art far more than Art imitates life.” と言ってみたり、とにかく Wilde には人の意表をつく逆説的名言が多いが、この童話集最後に収められた ‘The Remarkable Rocket’ もまた ‘The Devoted Friend’ 同様、まるで作品それ自体がそのまま皮肉と逆説と言ってもよい寓話である。無知と自惚のかたまりのようなすばらしい打上げ花火（そして実は少しもすばらしくない打上げ花火）が勝手に我こそは一流中の一流と大ぼらを吹きながら肝心の天覧花火大会ではすっかり面目をつぶし、あげくの果ては溝に捨てられ、白昼見物してくれる人もないまま発火して散ってゆくという多分に喜劇的風刺を込めた内容で、この花火にとっては自業自得でも反面読む人にはこの上なく心わびしい印象を残す作品である。

以上、*The Happy Prince and Other Tales* に収録された五編の童話をその配列順に極く簡単に解説した。わずかながらも読む際の手引きになればと思うからである。もちろんこの他にも Wilde の童話の特徴づける要素はたくさんある。当然その中にはここで扱うべきだったものも少なくない。けれども反面、各々の作品をどう感じるかはあくまでもお読みになる読者諸君の問題でもあるから、あとは各自みなさんの鑑賞力におまかせしたい。

ただ最後に、Wilde の体内には常にその両親から受継がれたアイルランドの民族、民話的精神と熱心に教会へ通った幼い頃のキリスト教ローマ・カトリック的精神との二大潮流があって、やや大袈裟になるが、ほぼ全ヨーロッパの文化が、イギリス文学をも含めて、いわゆるヘブライズム文化とヘレニズム文化の接点に開花したと言われるように、Wilde の文学もまたこの二大潮流が時には相携えて流れ、時には相反発して逆巻くところに花ひらいた芸術であることと、これら童話の創作にあたっては、彼がことのほかいとおしんだ二人の愛児 Cyril と Vyvyan のことが絶えず念頭にあったであろうことをつけ加えて Wilde 理解の一助としたい。

CONTENTS

INTRODUCTION	i
The Happy Prince	1
The Nightingale and the Rose	13
The Selfish Giant	21
The Devoted Friend	27
The Remarkable Rocket	40
NOTES	53

ILLUSTRATIONS

'I can see all the ugliness and all the misery of my city'

'She has let her matches fall in the gutter'

... and they wandered out into the rain

And he kissed the Happy Prince ...

So it was always Winter there

At last he lost his way



THE HAPPY PRINCE

HIGH above the city, on a tall column, stood the statue of the Happy Prince. He was gilded all over with thin leaves of fine gold, for eyes he had two bright sapphires, and a large red ruby glowed on his sword-hilt.

He was very much admired indeed. 'He is as beautiful as a weathercock,' remarked one of the Town Councillors who wished to gain a reputation for having artistic tastes; 'only not quite so useful,' he added, fearing lest people should think him unpractical, which he really was not.

'Why can't you be like the Happy Prince?' asked a sensible mother of her little boy who was crying for the moon. 'The Happy Prince never dreams of crying for anything.'

'I am glad there is someone in the world who is quite happy,' muttered a disappointed man as he gazed at the wonderful statue.

'He looks just like an angel,' said the Charity Children as they came out of the cathedral in their bright scarlet cloaks and their clean white pinafores.

'How do you know?' said the Mathematical Master. 'You have never seen one.'

'Ah! but we have, in our dreams,' answered the children; and the Mathematical Master frowned and looked very severe, for he did not approve of children dreaming.

One night there flew over the city a little Swallow. His friends had gone away to Egypt six weeks before, but he had stayed behind, for he was in love with the most beautiful Reed. He had met her early in the spring as he was flying down the river after a big yellow moth, and had been so attracted by her slender waist that he had stopped to talk to her.

'Shall I love you?' said the Swallow, who liked to come to the point at once, and the Reed made him a low bow. So he flew round and round her, touching the water with his wings, and making silver ripples. This was his courtship, and it lasted all through the summer.

'It is a ridiculous attachment,' twittered the other Swallows; 'she has no money, and far too many relations'; and indeed the river was quite full of Reeds. Then, when the autumn came, they all flew away.

After they had gone he felt lonely, and began to tire of his lady-love. 'She has no conversation,' he said, 'and I am afraid that she is a coquette, for she is always flirting with the wind.' And certainly, whenever the wind blew, the Reed made the most graceful curtsies. 'I admit that she is domestic,' he continued, 'but I love travelling, and my wife, consequently, should love travelling also.'

'Will you come away with me?' he said finally to her, but the Reed shook her head, she was so attached to her home.

'You have been trifling with me,' he cried. 'I am off to the Pyramids. Goodbye!' and he flew away.

All day long he flew, and at night time he arrived at the city. 'Where shall I put up?' he said; 'I hope the town has made preparations.'

Then he saw the statue on the tall column.

'I will put up there,' he cried; 'it is a fine position, with plenty

of fresh air.' So he alighted just between the feet of the Happy Prince.

'I have a golden bedroom,' he said softly to himself as he looked round, and he prepared to go to sleep; but just as he was putting his head under his wing a large drop of water fell on him. 'What a curious thing!' he cried; 'there is not a single cloud in the sky, the stars are quite clear and bright, and yet it is raining. The climate in the north of Europe is really dreadful. The Reed used to like the rain, but that was merely her selfishness.'

Then another drop fell.

'What is the use of a statue if it cannot keep the rain off?' he said; 'I must look for a good chimney-pot,' and he determined to fly away.

But before he opened his wings, a third drop fell, and he looked up, and saw—— Ah! what did he see?

The eyes of the Happy Prince were filled with tears, and tears were running down his golden cheeks. His face was so beautiful in the moonlight that the little Swallow was filled with pity.

'Who are you?' he said.

'I am the Happy Prince.'

'Why are you weeping then?' asked the Swallow; 'you have quite drenched me.'

'When I was alive and had a human heart', answered the statue, 'I did not know what tears were, for I lived in the Palace of Sans-Souci, where sorrow is not allowed to enter. In the day time I played with my companions in the garden, and in the evening I led the dance in the Great Hall. Round the garden ran a very lofty wall, but I never cared to ask what lay beyond it, everything about me was so beautiful. My courtiers called me the Happy Prince, and happy indeed I was, if pleasure is happiness. So I lived, and so I died. And now that I am dead they have set me up here so high that I can see all the ugliness and all the misery of my city, and though my heart is made of lead yet I cannot choose but weep.'

'What! is he not solid gold?' said the Swallow to himself. He was too polite to make any personal remarks out loud.